

日本の小学校教科書コーパス分析による社会科語彙に関する研究

深谷 圭助*

A Study on Social Studies Vocabulary by Corpus Analysis of Elementary School Textbooks in Japan

FUKAYA Keisuke

要 約

本研究の目的は、日本の小学校社会科教科書における教科書語彙にどのような傾向がみられるかを言語学的視点から量的・質的に分析することで社会科の指導を効果的にすすめる方法を明らかにすることである。

教科書の内容の読解においては、教科書の語をどの程度、理解しているのが重要である。

子どもが語の理解を十分にしていない場合、教科で求められている理解の水準に到達できないことが危惧される。

例えば、国語よりも寧ろ他教科で頻出する語に関して、その語に対する基礎的な理解が十分でないために、教科で求められる理解に至っていないことが考えられる。片上宗二は、社会科特有の用語に着目し、語の理解不足によって社会認識が育たないことを問題視している。また、社会科教育において使用されている社会科用語を集め、解説している著作は、学習参考書として存在するが、これらの用語は、名詞や固有名詞が圧倒的に多く、社会科教科書に、動詞、形容詞、形容動詞等の用言を含め、如何なる語彙が、如何なる頻度で登場するのかを本格的に社会科教育の立場で検討した先行研究は、管見の限り見当たらない。

本研究では、国語辞典編集を目的として教科書語彙を収集した「教科書コーパス」を研究対象とする。まず、教科書コーパス、特に社会科に関する用語を分類・分析することにより、各学年における社会科の教科書用語の学習状況を把握する。そして、特に社会科における言語指導の視点から、効果的な指導のあり方を明らかにしたい。

1. はじめに ―研究目的と方法―

本研究の目的は、日本の小学校社会科教科書における教科書語彙にどのような傾向がみられるかを言語学的視点から量的・質的に分析することで、教科の指導、特に社会科の指導を効果的にすすめる指針を明らかにすることである。

教科書の内容の読解においては、教科書用語をどの程度理解しているのが重要である。用語の理解が十分でない場合、教科で求められている理解の水準に到達できないことが危惧される。例えば、国語よりも寧ろ他教科で頻出する語に関して、その語に

対する基礎的な理解が十分でないために、教科で求められる理解に至っていないことが考えられる。片上宗二は、社会科特有の用語に着目し、語の理解不足によって社会認識が育たないことを問題視している¹⁾。また、社会科教育において使用されている社会科用語を集め、解説している著作は、学習参考書として存在するが、これらの用語は、名詞や固有名詞が圧倒的に多く、社会科教科書に、動詞、形容詞、形容動詞等の用言を含め、如何なる語彙が、如何なる頻度で登場するのかを本格的に社会科教育の立場で検討した先行研究は、管見の限り見当たらない。

本研究では、国語辞典編集を目的として教科書語彙を収集した「教科書コーパス²⁾」を研究対象とし、この教科書コーパスを分類・分析することにより、

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

各学年における教科書用語の学習状況を把握し、効果的な指導方法のあり方を、特に社会科における言語指導の視点から明らかにしたい。

2. 先行研究の検討

これまで、教科書用語を研究調査の対象とした先行研究は、主に言語学、国語学、日本語学の分野で行われてきている。また、教育においてどのような語彙を獲得させることが望ましいかという問題意識は、以前から存在する。

山崎誠は、これまでの語彙調査の歴史について、以下のように述べている。

「当初の目的は教育、あるいは、つづり字を調べたり、速記のためにどういう語がよく使われているのかを調べたりするという、かなり実用的な目的が多かったようです。日本でも1920年ぐらいから同じような調査が行われていまして、古くは昭和初期に、当時中国とか満州に進出していた教育団体、満州鉄道などで編集した『基礎日本語』や、戦前の児童読物の語彙調査などが、教育のための基本語彙を作成しています。これは、非母語話者に対して行われていたようです³⁾」

このことから分かるように、語彙調査の目的は、教育、しかも非母語話者の教育のために、どのような語彙を教えることが望ましいのかを調査するために行われていたことが推察される。その後の語彙調査の系譜として、山崎は、以下の国立国語研究所研究の系譜を中心に示している。

- (1) 準備期 (1948～1950年)
 - ・『語彙調査—現代新聞用語の一例—』(1952年)
- (2) 発展期 (1950～1964年)
 - ・『婦人雑誌の用語』(1953年)
 - ・『総合雑誌の用語』(1957、1958年)
 - ・『雑誌九十種の用字用語』(1962、1963、1964年)
- (3) 展開期 (1965～1973)
 - ・『電子計算機による新聞の語彙調査』(1970、1972、1973年)
- (4) 停滞期 (1974～1987年)
 - ・『高校教科書の語彙調査』(1983、1984年)
 - ・『中学校教科書の語彙調査』(1986、1987年)

- ・『高校・中学校教科書の語彙調査分析編』(1989年)
- (5) 探索期 (1988～1999年)
 - ・『テレビ放送の語彙調査』(1995、1997、1999年)
- (6) 整理期 (2000～2006年)
 - ・『現代雑誌の漢字調査』(2002年)
 - ・『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』(2005年)
 - ・『現代雑誌の表記—1994年発行70誌』(2006年)
- (7) 普及期 (2007年～)
 - ・形態素分析ソフトの発達
 - ・コーパスの普及
 - ・語彙調査の自動化、個人化へ

第2次世界大戦後間もない準備期から展開期においては、新聞語彙や雑誌語彙について、停滞期においては、中学校、高等学校教科書について、探索期以降は、テレビ放送語彙、現代雑誌語彙について再び調査している。整理期以降は、これまで膨大な作業量を要していた語彙調査が、コンピュータによって簡便に行うことができるようになった。このことにより、日本語の実態、動態が明らかになるようになった。

先述のように、日本における語彙調査は、日本語教育を必要とした、満州、南洋地域から教育的必要性から始まった。しかし、その後、語彙調査の目的が、我が国の初等教育十分に初等教育に活かされているとはいえない。また、教科書語彙にそのものに関する調査が始まったのは1980年代以降である。

小学校教科書について、語彙調査を本格的に行ったものとしてよく知られているのは、1958年に刊行された、阪本一郎『教育基本語彙』(牧書店、1958年)及び、同じく阪本により1984年に刊行された『新教育基本語彙』(学芸図書、1984年)である。阪本は、「小学校から中学校にかけての義務教育の9年間に国語の単語をどのような範囲で、どのような順序で学習させるのがよいのかの基準を示したものの⁴⁾」とこれらの著作について述べている。阪本は、『新教育基本語彙』において、小学校・中学校で学習すべき語彙として、小学校で約10,000語、中学校で約10,000語を具体的な語彙として示しており、教科書と児童向け読み物の調査から同書を作成してい

る。これらの著作は、現在までの教育基本語彙のベースとなってきており、現代における、小学生向け学習国語辞典の収録語彙の選定に影響を与えている調査である。しかし、如何にもこれらのデータは古く、教科書語彙や児童に教育すべき語彙について明らかにしたものは管見の限り見当たらない。

最近の教科書語彙に関する研究としては、田中牧郎、相澤正夫、斎藤達哉、棚橋尚子、近藤明日子、河内昭浩、鈴木一史、平山允子「言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用」(『国立国語研究所特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班報告書』)、文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21世紀の日本語研究の基盤整備」(代表者：前川喜久雄、2011年2月)がある⁵⁾。この研究は、小学校、中学校、高等学校各教科の教科書を一種類選び、すべての語彙を取り出したものであり、147冊の教科書をその対象としている。また、同研究は小学校から高等学校までの教科書語彙を対象にしたものであるが、各教科一種類の教科書しか扱っておらず、小学校教科書調査として、また、小学校社会科教科書調査としては、決して十分ではない。また、この研究において小学校における教科書語彙調査とその指導法への応用に対する関心は高いとは言えず、同研究においては中学校、高等学校の語彙

指導の事例や小学校の漢字指導の事例にとどまっている。これは、小学校において教科書語彙について専門的研究を行う実践的研究者が少ないことも大きな原因であろう。

このように、小学校、あるいは特定の教科における教科書語彙の研究を本格的にすすめた先行研究は少ない。この意味において、各教科教育学と言語学を架橋する研究は重要であり、各教科において言語活動をどのように考えるかという問題において、教科書用語を理解させるのかは重要である。

以上のように、教育学、教科教育学の分野での小学校教科書語彙研究、小学校社会科教科書語彙の研究は緒についたばかりと言ってよい。

本研究では、特に、小学校社会科教科書語彙の傾向を、(株)デジタルアシスト・(株)小学館が、辞典編集を目的として、2003-2007年に142冊の小学校教科書(図表2-1参照)から作成した「小学校教科書コーパス」(以下、教科書コーパスと略記)を研究対象として分析する。

この教科書コーパスを作成するにあたり、対象とした教科書は、以下の142冊である。

教科書選定規準は、教科書占有率が全体の8割以上になるように、教科書採択数上位の教科書から採録したものである。

図表 2-1 「教科書コーパス」採録教科書一覧 (2003-2007 年度の小学校検定教科書の内 142 冊)

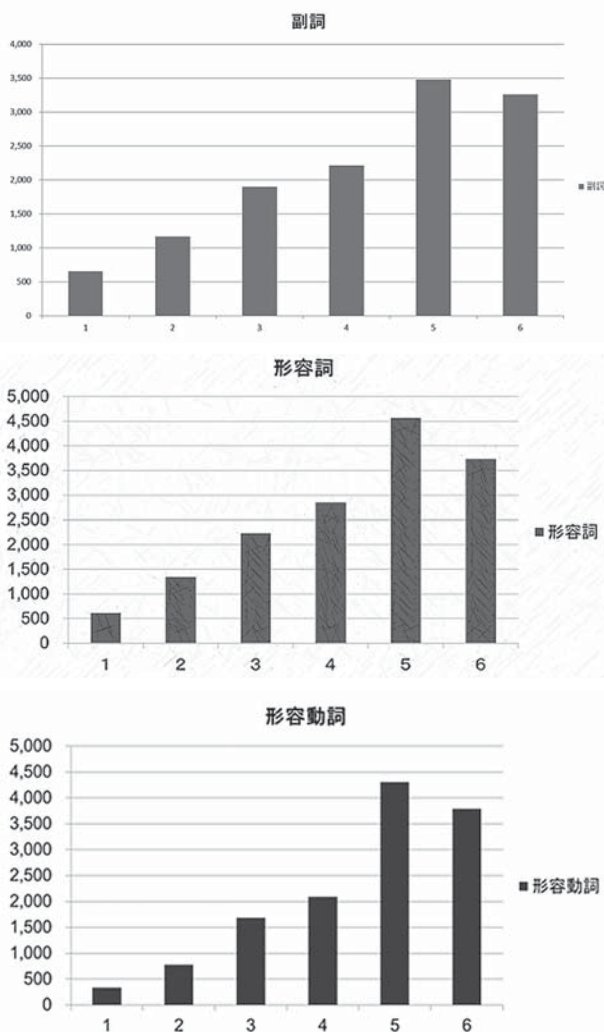
教科	出版社	学年	コード	教科	出版社	学年	コード
国語	教出	1・上	j10aKS	社会	教出	3・4・上	s34aKS
国語	教出	1・下	j10bKS	社会	教出	3・4・下	s34bKS
国語	教出	2・上	j20aKS	社会	教出	5・上	s50aKS
国語	教出	2・下	j20bKS	社会	教出	5・下	s50bKS
国語	教出	3・上	j30aKS	社会	教出	6・上	s60aKS
国語	教出	3・下	j30bKS	社会	教出	6・下	s60bKS
国語	教出	4・上	j40aKS	社会	東書	3・4・上	s34aTS
国語	教出	4・下	j40bKS	社会	東書	3・4・下	s34bTS
国語	教出	5・上	j50aKS	社会	東書	5・上	s50aTS
国語	教出	5・下	j50bKS	社会	東書	5・下	s50bTS
国語	教出	6・上	j60aKS	社会	東書	6・上	s60aTS
国語	教出	6・下	j60bKS	社会	東書	6・下	s60bTS
国語	東書	1・上	j10aTS	理科	啓林館	3	r30zKR
国語	東書	1・下	j10bTS	理科	啓林館	4・上	r40aKR
国語	東書	2・上	j20aTS	理科	啓林館	4・下	r40bKR
国語	東書	2・下	j20bTS	理科	啓林館	5・上	r50aKR
国語	東書	3・上	j30aTS	理科	啓林館	5・下	r50bKR
国語	東書	3・下	j30bTS	理科	啓林館	6・上	r60aKR
国語	東書	4・上	j40aTS	理科	啓林館	6・下	r60bKR
国語	東書	4・下	j40bTS	理科	大日本	3	r30zDN

国語	東書	5・上	j50aTS	理科	大日本	4・上	r40aDN
国語	東書	5・下	j50bTS	理科	大日本	4・下	r40bDN
国語	東書	6・上	j60aTS	理科	大日本	5・上	r50aDN
国語	東書	6・下	j60bTS	理科	大日本	5・下	r50bDN
国語	光村	1・上	j10aMM	理科	大日本	6・上	r60aDN
国語	光村	1・下	j10bMM	理科	大日本	6・下	r60bDN
国語	光村	2・上	j20aMM	理科	東書	3	r30zTS
国語	光村	2・下	j20bMM	理科	東書	4・上	r40aTS
国語	光村	3・上	j30aMM	理科	東書	4・下	r40bTS
国語	光村	3・下	j30bMM	理科	東書	5・上	r50aTS
国語	光村	4・上	j40aMM	理科	東書	5・下	r50bTS
国語	光村	4・下	j40bMM	理科	東書	6・上	r60aTS
国語	光村	5・上	j50aMM	理科	東書	6・下	r60bTS
国語	光村	5・下	j50bMM	図工	開隆堂	1・2・上	a12aKD
国語	光村	6・上	j60aMM	図工	開隆堂	1・2・下	a12bKD
国語	光村	6・下	j60bMM	図工	開隆堂	3・4・上	a34aKD
書道	東書	1	k10zTS	図工	開隆堂	3・4・下	a34bKD
書道	東書	2	k20zTS	図工	開隆堂	5・6・上	a56aKD
書道	東書	3	k30zTS	図工	開隆堂	5・6・下	a56bKD
書道	東書	4	k40zTS	図工	日文	1・2・上	a12aNB
書道	東書	5	k50zTS	図工	日文	1・2・下	a12bNB
書道	東書	6	k60zTS	図工	日文	3・4・上	a34aNB
算数	学図	1	m10zGT	図工	日文	3・4・下	a34bNB
算数	学図	2・上	m20aGT	図工	日文	5・6・上	a56aNB
算数	学図	2・下	m20bGT	図工	日文	5・6・下	a56bNB
算数	学図	3・上	m30aGT	生活	啓林館	1・2・上	l12aKR
算数	学図	3・下	m30bGT	生活	啓林館	1・2・下	l12bKR
算数	学図	4・上	m40aGT	生活	東書	1・2・上	l12aTS
算数	学図	4・下	m40bGT	生活	東書	1・2・下	l12bTS
算数	学図	5・上	m50aGT	保健	学研	3・4	h34zGK
算数	学図	5・下	m50bGT	保健	学研	5・6	h56zGK
算数	学図	6・上	m60aGT	保健	東書	3・4	h34zTS
算数	学図	6・下	m60bGT	保健	東書	5・6	h56zTS
算数	啓林館	1	m10zKR	音楽	教芸	2	o20zKG
算数	啓林館	2・上	m20aKR	音楽	教芸	3	o30zKG
算数	啓林館	2・下	m20bKR	音楽	教芸	4	o40zKG
算数	啓林館	3・上	m30aKR	音楽	教芸	5	o50zKG
算数	啓林館	3・下	m30bKR	音楽	教芸	6	o60zKG
算数	啓林館	4・上	m40aKR	音楽	教出	1	o10zKS
算数	啓林館	5・上	m50aKR	音楽	教出	3	o30zKS
算数	啓林館	5・下	m50bKR	音楽	教出	4	o40zKS
算数	啓林館	6・上	m60aKR	音楽	教出	5	o50zKS
算数	啓林館	6・下	m60bKR	音楽	教出	6	o60zKS
算数	東書	1	m10zTS	家庭	東書	5・6	f56zZZ
算数	東書	2・上	m20aTS	家庭	開隆堂	5・6	f56zKD
算数	東書	2・下	m20bTS				
算数	東書	3・上	m30aTS				
算数	東書	3・下	m30bTS				
算数	東書	4・上	m40aTS				
算数	東書	4・下	m40bTS				
算数	東書	5・上	m50aTS				
算数	東書	5・下	m50bTS				
算数	東書	6・上	m60aTS				
算数	東書	6・下	m60bTS				

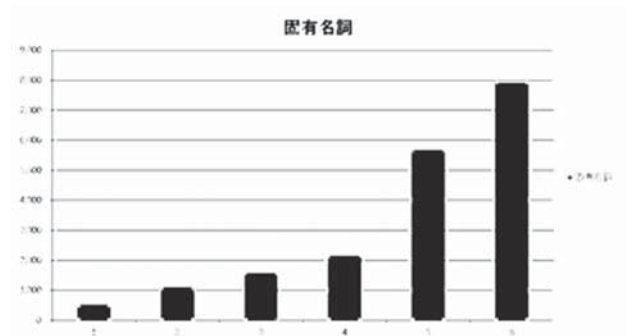
図表 3-1 教科書コーパスにおける各学年品詞別語彙出現度数分布表

学年	形容詞	形容動詞	助詞	助動詞	動詞	副詞	名詞	固有名詞
1	611	336	9,120	3,778	4,962	658	9,511	520
2	1,346	774	21,795	8,695	11,296	1,166	20,664	1,099
3	2,232	1,687	40,215	13,041	20,541	1,901	41,723	1,582
4	2,843	2,088	53,592	15,527	26,250	2,216	54,693	2,159
5	4,568	4,303	86,446	21,588	42,992	3,485	99,368	5,678
6	3,728	3,793	87,293	24,060	41,381	3,266	86,703	7,961
1・2年合計	1,957	1,110	30,915	12,473	16,258	1,824	30,175	1,619
3・4年合計	5,075	3,775	93,807	28,568	46,791	4,117	96,416	3,741
5・6年合計	8,296	8,096	173,739	45,648	84,373	6,751	186,071	13,639
低学年(1・2・3合計)	4,189	2,797	71,130	25,514	36,799	3,725	71,898	3,201
高学年(4・5・6合計)	11,139	10,184	227,331	61,175	110,623	8,967	240,764	15,798
全学年合計	15,328	12,981	298,461	86,689	147,422	12,692	312,662	18,999

図表 3-2 教科書コーパスにおける各学年教科書用言系語彙出現度数



図表 3-3 教科書コーパスにおける各学年教科書固有名詞語彙の出現度数



各学年における教科書語彙の出現度数を学年別に分類し、これを品詞別に表わした表が下表（図表3-1）である。なお、品詞の類型は、本研究の目標に即して独自に設定し、名詞を固有名詞とそれ以外の名詞に、そして、名詞、固有名詞を「体言系」品詞、動詞、形容詞、形容動詞を「用言系」品詞とした。また、各学年教科書語彙の品詞別頻出度数推移が分るようにグラフ化したものが図表3-2、図表3-3である。

まず、これらの図表から分かることを述べる。まず、用言系品詞（動詞、形容詞、形容動詞）の語彙に関しては、当該語彙出現度数の変化を分析した。用言系品詞の語彙は、小学校5年生に頻出度合いのピークを迎え、小学校6年生になると出現度合いが減少している。その一方で、固有名詞語彙の出現度数推移に関しては、小学校6年生が最大となっており、特に、小学校4年生から5年生、5年生から6年生と、大きくその出現度合いは増加している。

このことから、以下の2つのことが考えられる。1つめは、用言系語彙は、小学校5年生までにその理解度を確かめておく必要があるということであ

3. 研究の実際

(1) 教科書コーパスからみる低・高学年別教科書語彙比較

教科書コーパスの全体像を明らかにするために、

る。用言系語彙は、物事の関係性を表す時に用いられる語彙であり、物事の性質を表したり、論理的に説明したり、文章を構造的に理解したりする上で必要な語彙である。その語彙の最大出現度を示す学年が、小学校5年生であるということは、用言に着目した指導が、各教科において5年生までに着実に行われることが必要ということを示している。

2つめは、小学校高学年に、知識として記憶し、理解しておくべき固有名詞の教科書用語が、急激に増加することに十分備えることが必要であるということである。固有名詞等の体言系語彙（名詞、固有名詞）は、小学校5年生、6年生という高学年で、語彙の出現度数が急増している。これは、すなわち、覚えるべき語彙が増えるということを示している。こうした固有名詞の語を理解し、修得するためには、その語について、論理的に理解し、説明する力が求められるということである。従って、小学校5年生までに、用言系の用語について、各教科で意識をして指導することが必要であり、5年生から6年生で、修得すべき固有名詞が大きく増加することを認識することが必要である。このことを認識しておかないと、小学校高学年に記憶しなければならない「固有名詞」が増加することで、児童は理解を伴わない暗記を強いられることになる。

図表 3-4 固有名詞出現度数上位比較
(小学校低学年・高学年)

順位	低学年(123年)		高学年(456年)	
	頻度	固有名詞	頻度	固有名詞
1	48	一男	1082	日本
2	45	まき	252	中国
3	43	じんざ	164	東京
4	41	ひろし	157	アメリカ
5	41	ちい	132	兵十
6	40	さおり	115	北海道
7	39	スーホ	105	朝鮮
8	30	リョウ	105	賢治
9	30	けい子	82	沖縄
10	29	ウーフ	78	京都
11	27	日本	75	東京都
12	27	えつ	75	太一
13	27	あきら	72	江戸
14	26	豆太	72	テレサ
15	26	エルフ	72	アジア
16	26	まみ	70	ブラジル
17	26	たけし	69	韓国
18	25	狸	67	ノリオ
19	25	パーニー	66	太平洋
20	24	ゆきひろ	63	沖縄県

図表3-4固有名詞出現度数上位比較（小学校低学年・高学年）から、小学校低学年教科書における固有名詞出現度上位20語と小学校高学年教科書における固有名詞出現度数上位20語について比較・分析を試みた。

固有名詞用語に関しては、20語以内で重複するものは「日本」のみで、低学年においては、ほとんど「人名（国語科教科書における物語教材の登場人物名）」が占める。高学年においては多くを社会科内容の「地名」が占めている。このことから、低学年では、固有名詞で覚えなければならない重要用語は少ないことが分かる。

その一方で、図表3-5、3-6、3-7の用言系語彙を分析すると、低学年も高学年も出現度数が多い用語は重複することが多いことが分かる。登場頻度の高い用言の多くが重複しているということは、用言の重要頻出語は、低学年から確実に指導を積み重ねて

図表 3-5 動詞出現度数上位比較
(小学校低学年・高学年)

順位	低学年(123年)		高学年(456年)	
	頻度	動詞	頻度	動詞
1	3149	する	12282	する
2	2016	いる	7654	いる
3	1333	なる	4165	なる
4	1215	書く	3151	ある
5	1041	みる	2582	みる
6	861	ある	2395	調べる
7	859	言う	2319	言う
8	771	作る	1879	考える
9	663	考える	1805	使う
10	655	来る	1752	書く
11	568	使う	1730	作る
12	554	行く	1709	行く
13	542	調べる	1609	出来る
14	491	読む	1563	来る
15	459	出来る	1072	表す
16	422	見る	1023	見る
17	306	出る	895	思う
18	301	付ける	802	求める
19	297	有る	793	分かる
20	265	やる	745	付ける
21	260	分かる	661	読む
22	252	入る	651	される
23	250	表す	649	出る
24	247	分ける	645	変わる
25	244	思う	640	入れる
26	238	見付ける	557	比べる
27	235	聞く	489	よる
28	234	遊ぶ	486	やる
29	223	入れる	460	持つ
30	220	集める	455	入る

図表 3-6 形容詞出現度数上位比較
(小学校低学年・高学年)

順位	低学年(123年)		高学年(456年)	
	頻度	形容詞	頻度	形容詞
1	378	良い	991	良い
2	289	大きい	818	無い
3	192	無い	534	大きい
4	178	いい	508	多い
5	157	小さい	397	いい
6	157	楽しい	351	小さい
7	141	長い	347	新しい
8	116	多い	257	やすい
9	115	面白い	231	高い
11	107	赤い	228	等しい
12	99	白い	218	ない
13	97	青い	216	長い
14	95	高い	216	強い
15	94	新しい	161	広い
16	85	やすい	160	白い
17	69	短い	153	楽しい
18	64	嬉しい	146	速い
19	59	正しい	143	少ない
20	56	早い	133	赤い
21	54	広い	124	早い

いかねばならないということである。学習上、高学年において覚えるべき重要な地名や歴史上の重要人物に注目が集まりがちであるが、固有名詞の用語が示す概念を説明するためには、動詞、形容詞、形容動詞のような用言系語をよく理解し、文脈に依じて的確に使い、筋道を立てて説明できる力を育成する必要がある。特に、用言系語が、5年生で出現度のピークを迎えることから、小学校1年生から4年生までの間に、こうした用言系語彙に着目した言語的指導を各教科で行っていくことが不可欠だと考える。

図表3-5で、低学年で出現度が高い動詞と高学年で出現度の高い動詞で、重複しない語彙に注目してみよう。低学年頻出の動詞で、「集める」「分ける」「見付ける」という語句は、低学年児童の認知の道筋を表す語彙であるといえる。一方、高学年頻出の動詞で「変わる」「比べる」「求める」という語句は、高学年児童の認知の道筋を表す語であると考えられる。また、図表3-7から分かるように、低学年で出現度数の高い形容動詞用語には「大好きだ」「自由だ」「不思議だ」のような情緒的、感覚的な語が見られ、高学年で出現度数が高い形容動詞の用語として、「必要だ」「様々だ」「主だ」「豊かだ」「盛んだ」「便利だ」「身近だ」といった教科学習で重要な鍵を握る語が見られる。

図表 3-7 形容動詞出現度数上位比較
(小学校低学年・高学年)

順位	低学年(123年)		高学年(456年)	
	頻度	形容動詞	頻度	形容動詞
1	457	どんな	2452	ようだ
2	398	ようだ	1011	どんな
3	289	色々	910	同じだ
4	266	同じだ	551	色々
5	98	好きだ	259	大切だ
6	90	同じ	220	必要だ
7	53	こんな	166	同じ
8	50	きれいだ	157	様々だ
9	42	大好き	140	こんな
10	37	どんなだ	133	主だ
11	36	そんな	130	豊かだ
12	30	大切だ	102	そんな
13	25	不思議だ	93	きれいだ
14	21	大事だ	88	盛んだ
15	20	いや	85	好きだ
16	19	上手だ	70	どんなだ
17	18	大好きだ	65	便利だ
18	18	自由だ	64	あまり
19	18	たくさん	63	身近だ
20	17	真っ直ぐだ	60	静かだ

以上のように、教科書語彙を品詞別に小学校低学年と高学年に分け、その傾向を比較・検討することにより、各教科における語彙指導がどのように行われるべきか、その効果的な指導のすすめ方の指針を明らかにすることができる。

次節では、教科書コーパスの内、社会科教科書に出現する語に焦点を当て、社会科語彙の傾向と、効果的な社会科教科書指導のあり方について検討したい。

(2) 社会科教科書コーパスからみる語彙指導

① 社会科教科書コーパスにおける名詞・固有名詞について

小学校社会科教科書の語彙を、小学校3・4年生、5年生、6年生の学年別に語彙を収集し、固有名詞の比較・分析を試みた。(図表3-8参照)

まず、頻出度の高い固有名詞は、神奈川県、宮城県の地名等に偏っている。教科書採択の実際を鑑みれば、日本の3・4年生児童のほとんどが、神奈川県や宮城県の地名にかなりの頻度で触れていることが分かる。

小学校3・4年生では、地域学習を中心に行うことになっているが、地域教材が開発され、地域毎に独自の副読本が作成され、これを中心教材として指

図表 3-8 小学校 3・4 年生社会科教科書固有名詞出現度数上位語一覧 (20 位まで)

教科	学年	品詞	頻度	よみ	実表記
社会	3・4	固名	49	かながわけん	神奈川県
社会	3・4	固名	46	みうらし	三浦市
社会	3・4	固名	44	ようせん	養川
社会	3・4	固名	43	はやかわ	早川
社会	3・4	固名	41	はこねまち	箱根町
社会	3・4	固名	40	ゆかり	ゆかり
社会	3・4	固名	36	さおり	さおり
社会	3・4	固名	33	せんだいし	仙台市
社会	3・4	固名	32	よこはまし	横浜市
社会	3・4	固名	29	ゆうた	ゆうた
社会	3・4	固名	27	おだわらし	小田原市
社会	3・4	固名	27	さがみがわ	相模川
社会	3・4	固名	26	はこね	箱根
社会	3・4	固名	24	みやぎけん	宮城県
社会	3・4	固名	23	からすやまようすい	烏山用水
社会	3・4	固名	21	おだわら	小田原
社会	3・4	固名	19	あかね	あかね
社会	3・4	固名	19	きゅうべい	久兵衛
社会	3・4	固名	19	たな	田名
社会	3・4	固名	18	なるこちょう	鳴子町

導を行っているのが現状である。検定教科書の寡占的状态を鑑みれば、小学校3・4年生教科書に関しては、教科書採択地域の事例を反映しているとは言えない。検定教科書制度において、検定教科書を使用しなければならないという趣旨から鑑みれば、矛盾を抱えていると言わざるを得ない。

社会科教科書における各学年の固有名詞を比較すると、ほとんど重複するものがない。

図表3-8によれば、小学校5年生社会科教科書固有名詞出現度数上位語中は、「日本」が最も頻繁に出現している語彙であることが分かる。5年生社会科教科書コーパスにおいて2番めに出現度数が高い語彙が「庄内平野」であり、小学校社会科において、米作りの盛んな地域として紹介されている「庄内平野」は重要な位置を占めていると言える。

各学年の名詞を比較してみると、それぞれの学習内容のキーワードがよく分かる。5年生社会科教科書で頻出「名詞」語彙として、自動車、工場、米、

図表 3-8 小学校 5 年生社会科教科書固有名詞出現度数上位語一覧 (20 位まで)

教科	学年	品詞	頻度	よみ	実表記
社会	5	固名	199	にほん	日本
社会	5	固名	61	しょうないへいや	庄内平野
社会	5	固名	45	おきなわけん	沖縄県
社会	5	固名	43	おきなわ	沖縄
社会	5	固名	43	ほっかいどう	北海道
社会	5	固名	37	きたきゅうしゅうし	北九州市
社会	5	固名	29	あおもりけん	青森県
社会	5	固名	25	たいへいよう	太平洋
社会	5	固名	25	とうきょう	東京
社会	5	固名	23	いまい	今井
社会	5	固名	23	はちのへ	八戸
社会	5	固名	22	しらかみさんち	白神山地
社会	5	固名	20	あめりかがっしゅうこく	アメリカ合衆国
社会	5	固名	20	にいがたけん	新潟県
社会	5	固名	18	いとう	伊藤
社会	5	固名	17	のうりんすいさんしょう	農林水産省
社会	5	固名	16	にほんかい	日本海
社会	5	固名	15	いわてけん	岩手県
社会	5	固名	15	むいかまち	六日町
社会	5	固名	14	おおさか	大阪

海、輸入、森林などの語が見られるが、固有名詞と合わせて検討してみよう。2005年段階での日本の産業構造における就業者人口が、総務省統計によれば、15歳以上就業者数（6151万人）を産業3部門（注）別にみると、第1次産業は315万人（15歳以上就業者数の5.1%）、第2次産業は1592万人（同25.9%）、第3次産業は4138万人（同67.3%）となっていることからすれば、この日本の国のかたちを教える小学校の産業学習において、第3次産業に関わる語彙が不足している感は否めない⁶⁾。

農業や自動車産業が日本を代表する産業である時代から、この20年間の間に大きく移り変わりつつある中で、第3次産業、サービス業や情報産業に代表される語彙の頻度が低位であることは問題である。その背景には、日本の米作りについて相当な時間を割いて授業が展開されている事実が存在するの

図表 3-9 小学校 5 年生社会科教科書名詞出現度数
上位語一覧（出現度数 50 まで）

教科	学年	品詞	頻度	よみ	実表記
社会	5	名	490	こと	こと
社会	5	名	318	ねん	年
社会	5	名	311	ひと	人
社会	5	名	302	じどうしゃ	自動車
社会	5	名	208	こうじょう	工場
社会	5	名	189	ため	ため
社会	5	名	185	こめ	米
社会	5	名	154	じょうほう	情報
社会	5	名・する	107	くふう	くふう
社会	5	名	106	がつ	月
社会	5	名	104	かんきょう	環境
社会	5	名	102	うみ	海
社会	5	名	101	くるま	車
社会	5	名	98	づくり	づくり
社会	5	名・する	95	しごと	仕事
社会	5	名	90	さかな	魚
社会	5	名；助	86	ほか	ほか
社会	5	名	84	ようす	様子
社会	5	名	83	なか	中
社会	5	名	80	ぶひん	部品
社会	5	名・する	78	ゆにゆう	輸入
社会	5	名	77	しんりん	森林
社会	5	名	74	はなし	話
社会	5	名	74	ひとびと	人々
社会	5	名	74	へいせい	平成
社会	5	名	73	ちいき	地域
社会	5	名；形動だな	72	しぜん	自然
社会	5	名	71	みず	水
社会	5	名	70	きこう	気候
社会	5	名・する	70	せいさん	生産
社会	5	名	66	くらし	くらし
社会	5	名	66	もの	もの
社会	5	名	63	にゅーす	ニュース
社会	5	名	61	こうぎょう	工業
社会	5	名	58	しょくりょう	食料
社会	5	名	56	しーと	シート
社会	5	名・する	55	せいかつ	生活
社会	5	名	54	いね	稲
社会	5	名	54	ぜんこく	全国
社会	5	名	54	た	田
社会	5	名・形動だな； 副	54	たくさん	たくさん
社会	5	名；副	53	いま	今
社会	5	名	52	ふね	船
社会	5	名	51	これから	これから
社会	5	名	51	てれび	テレビ

図表 3-10 小学校 5 年生社会科教科書形容動詞出現度数
上位語一覧（出現度数 5 まで）

教科	学年	品詞	頻度	よみ	実表記
社会	5	形動だな	121	どんな	どんな
社会	5	形動	111	ように	ように
社会	5	形動	44	さまざまな	さまざまな
社会	5	形動	40	いろいろな	いろいろな
社会	5	形動	34	おもな	主な
社会	5	形動	33	おもな	おもな
社会	5	形動	28	ゆたかな	豊かな
社会	5	形動	25	さかんな	さかんな
社会	5	形動	25	たいせつ	大切
社会	5	形動	24	たいせつな	大切な
社会	5	形動	22	おなじ	同じ
社会	5	形動	22	ような	ような
社会	5	形動	20	たいせつに	大切に
社会	5	形動	15	あんぜんな	安全な
社会	5	形動	15	さかんに	さかんに
社会	5	形動	14	ひつよう	必要
社会	5	形動	12	ひつような	必要な
社会	5	形動	11	みちかな	身近な
社会	5	形動	10	きれいに	きれいに
社会	5	形動	8	しんせんな	新せんな
社会	5	形動	8	きれいな	きれいな
社会	5	形動	8	たいりょうに	大量に
社会	5	形動	8	べんりで	便利で
社会	5	形動	8	べんりな	便利な
社会	5	形動	7	せいかくに	正確に
社会	5	形動	7	たいへんな	大変な
社会	5	形動	7	ゆたかに	豊かに
社会	5	形動	6	きちょうな	貴重な
社会	5	形動	6	さかん	さかん
社会	5	形動	6	さかん	さかん
社会	5	形動	6	たいへん	大変
社会	5	形動	6	ふしぎに	不思議に
社会	5	形動だな	6	こんな	こんな
社会	5	形動だな； 副	6	あまり	あまり
社会	5	形動	5	あんぜんで	安全で
社会	5	形動	5	かいてきな	快適な
社会	5	形動	5	きれいに	きれいに
社会	5	形動	5	こくさいてき な	国際的な
社会	5	形動	5	こんなに	こんなに
社会	5	形動	5	べんりに	便利に
社会	5	形動	5	ゆうがいな	有害な

であるが、社会科の限られた授業時数、教科書の限られた紙面をどのように活用すべきかと考えた場合、特定の語彙が突出して多いことに関しては検討の余地がある。

② 社会科教科書コーパスにおける形容動詞について

小学校社会科教科書の語彙を、3・4年生、5年生、6年生の学年別に語彙を収集し、形容動詞の比較・分析を試みた。

形容動詞は、社会科における思考力を育成する際に、極めて重要な語彙である。例えば、「盛んだ」「豊かだ」という頻出語彙は、何をして「盛ん」と言わしめるのか、何をして「豊か」と言わしめるのかを具体的なデータや事例で説明できるようにすることが社会科においては求められるはずである。「様々な」「主な」も同様である。

社会科学的なものの見方や考え方を育てるためには、こうした社会科における形容動詞等の語彙をどのように理解させ、どのように活用させるのかは、極めて重要である。

こうした言葉の理解のさせ方や使い方は、国語科の授業だけでは効果的な指導は難しい。具体的にそれらの語彙に対応するデータや図表などがあるからこそ、語彙の指導は効果的に展開される可能性が高い。

その意味において、社会科教育における、「形容動詞」等の用言系語彙の指導は重要である。ところが、これまで、こうした視点での教科書読解、教科書理解のアプローチはとってこなかったと言ってよい。

社会科教科書における形容動詞の語彙について社会科教育で検討するべきなのではないか。勿論、社会科以外の他教科においても同様である。

4. おわりに

これまで、小学校教科書コーパスを分析し、小学校教科書語彙と日本の小学校社会科教科書における教科書語彙にどのような傾向がみられるかを言語学的視点から量的・質的に分析することを試みてきた。

その結果、以下の2つのことが明らかになった。

1つめは、教科書語彙の体言系語彙と用言系語彙の出現傾向が異なることである。体言系品詞である固有名詞の語彙は、小学校6年生をピークとして増加する傾向にあるのに対し、用言系品詞（動詞、形容詞、形容動詞）の語彙は、小学校5年生をピークとし、むしろ6年生では出現度合が低下することが明らかになった。

2つめとして、用言系語彙に関しては、多くの語が学年に関わらず出現し、重複しているのに対し、体言系語彙は、重複することが少ないことが明らかになった。つまり、用言系品詞の理解や活用の仕方についての学習は、早い段階から意識的に行うことができるということである。

本研究を通じて、社会科教科書指導の指針として2つのことを提案したい。

1つめは、用言系語彙（動詞、形容詞、形容動詞）の指導は、小学校5年生までに確実にを行い、その理解を深め、使い方について習熟させることが重要であること、2つめは、体言系語彙（固有名詞、名詞）に関しては、高学年、特に小学校6年生で大きく増加するので、機械的な暗記にとどまらないように指導すること。すなわち、地名や人名などの固有名詞については、既習の用言系語彙を活用して、論理的にその説明ができるように指導することが重要であるということである。

社会科語彙の品詞別検討は、まだ緒についたばかりであり、本研究ではその一端を扱うことしかできなかった。動詞、形容詞等についても検討をすすめ、社会科教育における言語学的アプローチという新たな教育スタイルの構築を目指したい。

注

- 1) 片上宗二『社会科教師のための「言語力」研究』風間書房、2013年1月。
- 2) コーパスとは、実際に使用された言語資料の集成であり、特に電子化された言語資料のことを言う。（新村出『広辞苑』第6版、岩波書店）
- 3) 山崎誠「国立国語研究所の語彙調査の歴史と課題」『東京大学大学院教育学研究家教育研究創発機構教育測定カリキュラム開発講座第12回公開研究会』2006年11月30日、172頁。
- 4) 阪本一郎『教育基本語彙』牧書店、1958年、1頁。な

お、全く同様の文章が、阪本一郎『新教育基本語彙』（学芸図書、1984年、1頁）のはしがきに掲載されている。この2つの著作を刊行する動機を阪本は『新教育基本語彙』のはしがきで次のように述べている。「たまたま昭和の始めごろ、文部省に招かれていた英国のパーマー氏から、米国のコロンビア大学教授ソーンダイク氏の『教師用語彙書』（1912年）があることを聞いたので、これを日本語に応用して作ってみようと思いついたのが動機である。」

- 5) 文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班が2006-2010年に「言語政策に役立つコーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用」に着手している。
- 6) 15歳以上就業者数（6151万人）を産業3部門（注）別にみると、第1次産業は315万人（15歳以上就業者数の5.1%）、第2次産業は1592万人（同25.9%）、第3次産業は4138万人（同67.3%）となっている。産業3部門別に15歳以上就業者数の推移をみると、第3次産業は調査開始以来増加が続いている。一方、第1次産業は昭和30年以降、第2次産業は平成7年以降、それぞれ減少が続いている。（注：産業3部門に含まれる産業大分類は次のとおり（第1次産業：「農業」、「林業」、「漁業」、第2次産業：「鉱業」、「建設業」、「製造業」、第3次産業：前記以外の産業）「変化する産業・職業構造」『2005年度国勢調査』ホー

ム ページ <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/sokuhou/03.htm>（2013年10月1日アクセス）

参考文献

- 甲斐睦朗『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』光村図書、1982年。
- 片上宗二『社会科教師のための「言語力」研究』風間書房、2013年1月。
- 工藤真由美『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙』ひつじ書房、1999年。
- 阪本一郎『教育基本語彙』牧書店、1958年。
- 阪本一郎『新教育基本語彙』学芸図書、1984年。
- 田中牧郎、相澤正夫、斎藤達哉、棚橋尚子、近藤明日子、河内昭浩、鈴木一史、平山允子「言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用」(『国立国語研究所特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班報告書」)
- 文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21世紀の日本語研究の基盤整備」(代表者：前川喜久雄、2011年2月)
- 山崎誠「国立国語研究所の語彙調査の歴史と課題」『東京大学大学院教育学研究家教育研究創発機構教育測定カリキュラム開発講座第12回公開研究会』2006年11月30日、172頁。

受付日 2019年9月30日

受理日 2019年10月29日

Abstract

The purpose of this study is to clarify the method of effectively promoting the guidance of social studies by analyzing quantitatively and qualitatively from a linguistic point of view what kind of tendency is seen in textbook vocabulary in Japanese elementary school social studies textbooks.

In reading the contents of textbooks, it is important to understand the words of textbooks to the extent that they understand them. If the child does not fully understand the language, it is feared that it is not possible to reach the level of understanding required in the subject.

For example, it is considered that the basic understanding of the word which is frequent in other subjects than the national language is not enough, and it has not reached the understanding required in the subject. Katagami Soji pays attention to the term peculiar to social studies, and it is a problem that the social recognition does not grow by the lack of understanding of the word. In addition, although the books that collect and explain social studies terms used in social studies education exist as learning reference books, these terms are overwhelmingly many nouns and proper nouns, social studies textbooks, including words such as verbs, adjectives, adjectiveverbs, etc., any vocabulary, The previous research which examined how often it appeared from the standpoint of the social

studies education in earnest is not found only in the tube view.

In this study, we study “textbook corpus” which collects textbook vocabulary for the purpose of editing a Japanese dictionary. First, by classifying and analyzing terminology related to textbook corpus, especially social studies, I would like to grasp the learning status of textbook terms in social studies in each grade. And, I want to clarify the ideal way of effective guidance from the viewpoint of language guidance especially in social studies.